

第75回全国公立小・中学校女性校長会全国研究協議大会東京大会

開催日 令和7年7月31日（木）／8月1日（金）

会場 ウェスティンホテル東京

大会主題

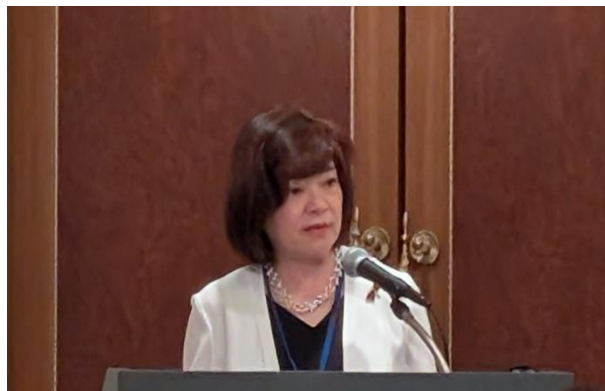
自ら未来を切り拓き 共によりよい社会を創る子供を育む 学校教育の推進

～多様性を認め合い 持続可能な社会の創り手として未来を創造する力を育む学校経営～

第1日 7月31日

第1回理事会

各都道府県の理事の皆様より、令和7年度の活動方針や事業計画、予算などについてご審議いただき、ご理解・ご協力を得るとともに、各地区の情報交換などを行いました。



司会 庶務部長 浮津 あゆみ



開会の言葉 副会長 古矢 美雪

令和7年度 第1回理事会 会長挨拶 山口 祐美子



会長挨拶 山口 祐美子

理事の皆様、おはようございます。

本日は、休業中とはいえ校務御多用のところ、朝早くよりお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、皆様には日頃より、各地区における女性校長会の推進と、本会の円滑な運営に御尽力いただいておりますことに、改めて感謝申し上げます。

この理事会では、令和7年度の活動方針案や事業計画案などについて御審議をいただき、御理解・御協力を得るとともに、本会の活動をより活性化させ、発展させていくための御意見を頂戴する場でもあります。限られた時間ではございますが、有意義なひとときとなりますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、先月、6月11日に文部科学省 あべ 俊子 大臣より「学校現場で働く教職員へのメッセージ」が発信されました。大臣は、「子供たちにとって、最も大切なのは、目の前の先生が元気でいてくれること」と述べ、教職員の健康と安心を制度と風土の両面から支えていくことの重要性を強調されました。このメッセージは、学校経営の最前線に立つ私たち女性校長にとって、深い共感と励ましをもたらすものであります。

教育現場では、教員の業務改善や働き方改革が喫緊の課題となっています。中央教育審議会からは、業務の見直しやICTの活用、教科担任制の推進、地域連携による支援体制の強化などが提言されています。本会におきましても、これまでも文部科学省へ現場の声を届けてまいりました。私たち女性校長は、持続可能な学校経営を実現し、教職員が子供たちとしっかり向き合える環境づくりを先導していく役割を担っています。

私たち女性校長が果たすべき使命の一つには、ジェンダー平等の実現があります。私たちが日々向き合う子供たちの姿から、ジェンダーに関する社会の変化や課題が見えてくることがあります。今年、ガールスカウト日本連盟が発表したジェンダー意識調査によると、約3人に1人（32.4%）が「性別を理由に役割を決められた経験がある」と回答しています。具体的には、男子生徒が力仕事を当然のように任される一方で、女子は「やらなくてよい」と言われたり、文化祭や学校行事では女子が受付や装飾を担うことが当然視されたりといった声が多

く寄せられました。その中には、「やりたいと申し出たのに止められた」という声もありました。こうした一人一人の経験の中に、私たちが解いていくべき“見えにくい壁”があるように思います。また、「男は仕事、女は家庭」という固定化された価値観に共感する層は少数派ではあるものの、約 2 割が「どちらかといえば賛成」と答えており、家庭や地域社会の影響が依然根強いことも見て取れます。こうした意識や経験は、進路選択や将来の夢にも影を落とします。性別を理由に夢をあきらめたことがあると答えた生徒が 6.3%いたという事実は、私たち学校教育のリーダーにアンコンシャス・バイアス解消への対応を強く問いかけています。

私たち女性校長は、すべての子供たちが、自分の性別にとらわれず、個性を発揮し、自分らしく挑戦できる学校文化をつくる責任があります。「女の子だからこうあるべき」「男の子だからこうすべき」という無意識の思い込みに、大人の側が気付くことから、ジェンダー平等の第一歩が始まります。本会における取組が、子供たちの学びと育ちにしなやかな風を送り、未来に希望をつなぐ力となるよう、皆様とともに進んでまいりたいと思います。

本会の活動状況調査によれば、全国的女性管理職の数は着実に増えております。この女性管理職増加において、本会の存在は大変大きな力となってまいりました。しかしながら、教育界においても、女性管理職の登用には、依然としてある格差は解消されておりません。一般企業においては出産を終えた女性の活躍の場は当然のように奪われており、給与面の男女差は今もなお厳しい現状であることを忘れてはなりません。全国各地の理事の皆様との連携とリーダーシップが今こそ求められております。ともに力を合わせて、真の男女共同参画社会の実現に向けて、私たちの組織の強化と発展を、前に前に進めてまいりましょう。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり、計画的に周到な準備を進めてられました 古矢 美雪 東京都公立小・中学校女性校長会会長、田中 明子 大会実行委員長をはじめ、東京都実行委員会の皆様に心より感謝申し上げます。そして、全国から御参集の皆様にとって、この 2 日間が実り多い学びと出会いの場となりますことを心より願っております。

今後とも、理事の皆様の方強い御支援を賜りますよう、お願い申し上げます、挨拶とさせていただきます。

令和7年度 第1回理事会 顧問挨拶 井口 美由紀



顧問挨拶 井口 美由紀

理事の皆様、おはようございます。
日頃より、本会の様々な活動に御理解と御協力をいただきまして、感謝申し上げます。そして、本日、理事会、並びに東京大会に参加し、実行委員の皆様への応援をいただきますことにも心より御礼申し上げます。

この理事会を迎えるにあたり、私は

「近代日本の父」とも称される渋沢栄一氏の業績を思い起こします。渋沢氏は500以上の企業を設立・育成した一方で、教育や社会福祉の分野でも深く関与し、「女子に学問は不要」とされた時代に、女子教育の重要性を説いた先駆者でもありました。彼は東京女学館はじめ女子のための学校設立に複数かかわるなど、女性の学びが国家を支えるという信念をもち、教育の普及と人間形成を重視しました。

私たちもこうした先人の志を受け継ぎ、決して後進の道を閉ざすことのないよう、誰もが尊重され、全ての子供たちが夢や希望をもって成長できる学校づくりを進めてまいりましょう。学校教育において幼いころからのアンコンシャス・バイアスを払しょくし、多様性と包摂性を重視した学校づくりを目指して、私たち女性校長が社会に向けて発信するメッセージにこそ次代を変えていく力があると確信しております。

近年教育現場を取り巻く環境は急速に変化しております。文部科学省では生成AIなどのデジタル技術の進展を踏まえ、学習指導要領の改訂に向けた検討を進めており、柔軟な教育課程の在り方が強調され、様々な課題を抱える児童・生徒への支援体制が強化されています。

こうした動向を踏まえ、私達のこの全国研究協議大会では、毎年、分科会・分散会のテーマを定めてまいりました。女性校長ならではの視点で課題解決に向けた実践発表がなされ、参加者同士の和やかでありながらも熱心な話し合いを積み重ねて参りました。

東京都の実行委員会の皆様の熱き思いに、私達全員が応えるためにも、ここにいらっしゃる理事の皆様と共に、この貴重な学びの場をより一層充実した会にするために精一杯力を尽くし、互いの学びを深めてまいりましょう。

皆様、最後までどうぞよろしくお願い申し上げます。



議事 司会

副会長 佐々木 優子



令和6年度事業報告

令和7年度事業計画（案）

庶務部長 浮津 あゆみ



令和6年度決算報告

令和7年度予算（案）

会計部長 石川 千影



令和6年度監査報告

監査 中川 佳美



令和7年度活動方針（案）

対策部長 江口 千穂



全国大会開催県・発表県等について



令和7年度東京大会について（実行委員会本部紹介）



令和8年度青森大会について
青森県理事 竹原 まり子 他

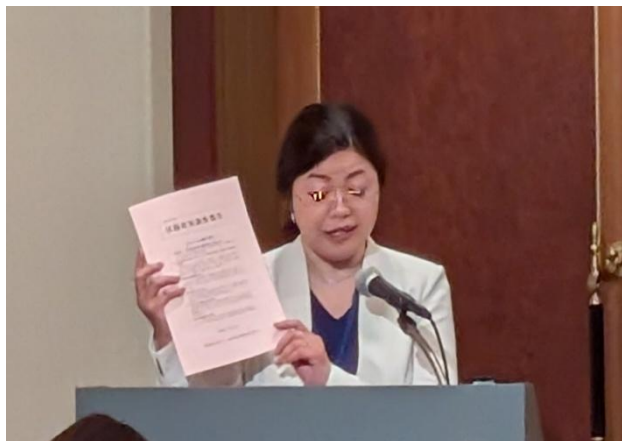


令和9年度大分大会について
大分県理事 大島 真美



選考委員会報告 選考委員長
東京都理事 小川 真由美

報告・連絡事項



活動状況調査の依頼について



地区大会について



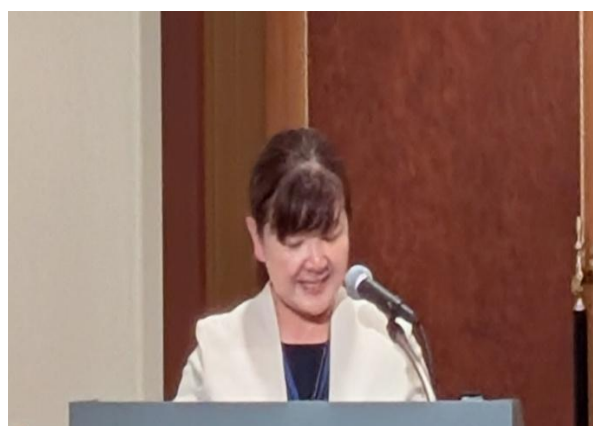
会報119号について



会報120号について



ホームページについて



表彰状贈呈について



地区情報交換



閉会の言葉 副会長 中谷 由恵子

開会式

- 1 開式の言葉
- 2 国歌斉唱
- 3 挨拶
- 4 祝辞
- 5 来賓紹介
- 6 全国女性校長会の歌斉唱
- 7 閉式の言葉



開式の言葉 全国公立小・中学校女性校長会
副会長 古矢 美雪



挨拶 全国公立小・中学校女性校長会
会長 山口 祐美子

本日、第75回全国公立小・中学校女性校長会全国研究協議大会を、文化と先進性が融合するここ、東京都目黒区において、全国より多くの会員の皆様をお迎えし盛大に開催できますことを誠にありがたく、厚く御礼申し上げます。

本日は公務ご多用の中を、文部科学省 初等中等教育局 視学官 藤野 敦 様、東京都教育庁指導部 義務教育指導課長 毛利 元一 様、目黒区長 青木 英二 様をはじめ、御臨席を賜りました御来賓の皆様、また開催にあたり、力強い御協力・御支援を頂戴いたしました関係諸機関の皆様に心より感謝申し上げます。

本会は多くの先輩方の御努力により、女性校長の地位の向上と教育現場における人材育成を図りながら、学校教育の振興に寄与してまいりました。昭和26年、80名でスタートした当時は、戦後の混乱期を抜けたとはいえ、まだまだ女性にとってはかなり厳しい社会状況の中にありました。そのような中でも「同士よ 弱らないで、誠実は奇跡を生む」と励まし合い、助け合い、「知性・品性・感性」を大切にしながら、世の信頼を得てまいりました。以来、その意思や活動が連綿と引き継がれ、ここに第75回全国研究協議大会を開催するに至りました。今日に至るまでの歩みは、まさに女性校長たちの気概にあふれた誇りと努力の結晶であり、確かな学びの場となっています。

今年6月、あべ 俊子 文部科学大臣より、教職員の働き方改革の一層の加速に向けたメッセージが発出されました。教員の多忙化と長時間労働の常態化が、教育の質や教職の魅力に深刻な影を落としつつある今、これは学校だけでなく、社会全体が取り組むべき喫緊の課題であると、改めて示されました。給特法の改正によって、教育委員会には「働き方改革に関する計画」の策定と公表が義務づけられ、教職調整額の引き上げや主務教諭制度の創設など、制度改革が大きく動き始めています。私たち学校の管理職が先頭に立ち、現場の改革を実行に移していくことが、今、何よりも求められています。働きやすさと働きがいの両立、これは、まさに学校における男女共同参画の実現と、真の多様性社会への入り口でもあります。

資源の限られた日本においては、人こそが最大の財産であり、人を育てる教育こそが、未来をつくることそのものであると考えます。令和4年8月22日付の

「日本教育新聞」には、「生まれ変わっても教員に」という見出しの記事が掲載されました。これは、教職員向けのジブラルタ生命保険が、全国の教員2千名を対象に行った調査です。「生まれ変わったら就きたい職業」に、17.8%の人が「教員」と回答し、最も高い割合となったと報告されています。こうした結果は、教師という仕事には、いまなお希望と誇りが息づいていると感じました。近年、教員の採用倍率が定員割れとなっていると聞きますが、日々の仕事の中から得られる、やりがいや達成感は、他に代えがたいものであり、格別なものであります。それがこの数字に表れていると思います。私たち女性校長は、教員が働きがいを実感しながら、共に子供たちの成長を喜べる職場づくりに邁進してまいります。

性別を問わず、誰もが自分らしく力を発揮できる職場環境の整備、育児や介護と仕事を両立できる制度の拡充、そして女性教職員が希望をもてるロールモデルの提示。それら一つ一つが、子供たちの未来を明るく照らす「教育の持続可能性」につながっていきます。私たち女性校長は、教育現場をより良い方向に動かし、子育てをする仲間を支え、未来を拓く力をもっています。私たちの高い志を結集し、持続可能で希望ある社会の実現に向けて、次の一步を踏み出してまいりましょう。

教育界においては、校長、教頭・副校長への女性登用は進んできたとはいえ、地域によっては依然として「ガラスの天井」が存在しています。こうした現状に対し、私たち全国の女性校長が連携し、学校から社会を変える力を力強く発揮していくことが求められています。

また、本会の果たすべき大切な使命の一つは、研究協議を通じて、現場からの学びを深化させ、都道府県組織の連携と強化を図ることです。大会を通して得られる知見は、学校経営のみならず、教育全体の質の向上につながるものであり、地域を越えた連携と全国ネットワークの構築にもつながります。全国の皆さまと手を携えて、男女共同参画社会の促進と教育界における真の多様性を認め合う社会の実現を、ここ東京から、力強く進めてまいりましょう。

結びにあたり、歴代の東京都理事の皆様、古矢 美雪 東京都公立小・中学校女性校長会会長、田中 明子 大会実行委員長をはじめ、東京都実行委員会の皆様の3年に及ぶきめ細やかな御準備に対しまして、深く感謝申し上げます。そして、御出席くださいました皆様にとりまして、この大会が学校経営に資する多くの示唆に富んだ深い学びの場となりますことを祈念し、私の挨拶といたします。



挨拶
東京大会実行委員長 田中 明子



祝辞 文部科学省初等中等教育局視学官
藤野 敦 様



祝辞 東京都知事
小池 百合子 様



祝辞 目黒区長
青木 英二 様



祝辞 全国連合小学校長会
会長代理
調査研究部長 高瀬 智子 様



来賓紹介



全国公立小・中学校女性校長会の歌斉唱
指揮 東京都実行委員 峯岸 敦子



閉式の言葉 全国公立小・中学校女性校長会
副会長 中谷 由恵子

